

【論 説】

20世紀前半のペナンにおけるジャウイ・プカン

『ストレイツ・エコ』のマレー人論争から

山本博之

I はじめに

1. マレー・ナショナリズム研究とプラナカン

マレー人とは混成性と純血性という相反する2つの側面が強調される集団カテゴリーであり、その成り立ちが研究者の関心を集めてきた。代表的な研究としてウィリアム・ロフによるマレー・ナショナリズムの起源に関する研究 (Roff, 1967) がある。20世紀以降に多く発行されるようになったマレー語の新聞・雑誌の分析を通じて、日本占領期の直前までのマレー・ナショナリズムの展開を跡付け、アラビア語教育を受けた中東志向の宗教改革者、インドネシア・ナショナリズムの影響を受けたマレー語知識人、英語教育を受けた地元の支配階層の3つの潮流を明らかにした。

ロフの研究はマレー・ナショナリズム研究として学術的に高く評価されているとともに、マレーシア社会においても広く受け入れられている。しかしロフの研究は、シンガポールで刊行されたマレー語出版物に多く依拠し、マレー語出版物を通じて中東からもたらされた宗教改革思想を過大評価するとともに、シンガポール社会で顕著に見られた民族の境界 (とりわけムスリム内のマレー人と非マレー人の境界) を明確に捉える考え方を過度に重視するという特徴がある。このように、シンガポールの枠組に大きく影響を受け、民族間の境界を明確に捉える民族認識を本稿ではシンガポール型の民族認識と呼ぶ。

これに対し、ペナンでは南アジアの影響が相対的に大きく、また、民族の境界を曖昧に捉えるという特徴が見られた。1945年の日本占領期終了から1957年のマラヤ連邦独立までの間に、シンガポール型の民族認識をもとにした民族統合モデル (互いに明確に区切られたマレー人、華人、インド人が集まって1つの社会を作る) がマラヤ全体で公式のものとなり、それ以外の民族統合モデルは表舞台から姿を消した。ただし、それによってシンガポール型以外の民族認識がなくなったわけではなく、公式の場で語られることなく底流として残っている¹。

¹ 2000年代以降のマレーシアで政界再編に伴ってマレー民族政党が多極化していることも、近年の新しい傾向ではなく、長く底流化していたものが表面化したと見ることもできるだろう。

シンガポール型以外にどのような民族認識があったのか、そしてマラヤ連邦の独立までにシンガポール型の民族認識がどのようにして支配的になっていったのかを明らかにすることは、学術研究にとってもマレーシア社会のゆくえを考える上でも意義がある。本稿は、20世紀前半のペナンにおける民族認識に目を向け、マラヤ独立の過程でペナン型の民族認識がどのような位置づけを得たのかを検討し、シンガポール型と異なる民族認識の一端を示すことを目的とする。

2. プラナカンとジャウィ・プカン

マレー人の民族認識を考える上で重要な概念にプラナカン (peranakan) がある。プラナカンはマレー語で「子」を意味する「アナック」(anak) の派生語で、「現地生まれ」や「混血」を意味し、典型的には外来の男性とマレー人女性間に生まれた子およびその子孫を指す。マレー人という集団性は、外延にプラナカンを置くことで、外来者をときに包摂し、ときに排除して形作られてきた。

しかし、プラナカンを分析概念としてマレー民族意識やマレーシアの民族統合を理解する試みはあまりなされてこなかった。その背景として、プラナカンは地域や時代によって指し示す具体的な対象(および呼称)が異なること²、しばしば支配層または多数派によって「純粋でないもの」と見下す意図をもって使われてきたことが考えられる。

そのようなプラナカンの1つとして、植民地期のペナンにはインド人とマレー人との混血者であるジャウィ・プカン (Jawi Pekan)³ と呼ばれる人びとがいた⁴。「ジャウィ」とは中東で東南アジアの人または物を指す言葉で、東南アジアにもたらされると「外来起源を持つがマレー人の一部になったもの」または「マレー人」と理解された (Laffan, 2003:13-14)⁵。「プカン」はマレー語で「町」または「市場」を意味する。

² インドネシアでは、多くの場合にプラナカンは華人系を指し、トトック (中国生まれ) に対して移住地生まれで現地化した華人を指す呼称として理解されている。(真好, 2016) を参照。アラブ系のトトック (アラブ生まれ) に対するプラナカン (移住地生まれ) については (山口, 2018) を参照。シンガポールおよびマレーシアの一部 (マラッカとペナン) では、今日ではプラナカンは現地化した華人を指し、西洋文化と東洋文化の融合またはマレー文化と中華文化の融合というイメージが観光資源として利用されることが多い。

³ 「ジャウィ・プカン」は文献ごとに表記の違いがあり、同一文献に複数の表記が見られることもある。本稿では Jawi Pekan, Jawi Pukan, Jawipukan, Jawi Pakan, Jaweepekan などを本文では「ジャウィ・プカン」と書く。

⁴ 19世紀に刊行されたマレー語辞書には、ジャウィ・プカンの語義として、「The offspring of Malay mothers and Kling or Bengali fathers. They are a clever race and not ill-looking. Several of the best native police are Jawipukans.」(Dennys, 1894:168)、「a name (of disputed origin) applied to a class of people of mixed Malay and Indian descent, but born in the Straits and speaking the Malay language.」(Wilkinson, 1901:218) がある。

⁵ マレー語・英語辞書の jawi の語義として「anything foreign naturalised among the Malays; bastard, or mixed race. The Arabs call the Javanese, the Malays, and other natives of the Archipelago, Jawi; and hence, probably, the present word.」(Crawford, 1852:59)、「bastard, or of mixed race」「The Arabs apply this term to Javanese, Malays, and other natives of the

マラヤの人口センサスにおける集団カテゴリーを研究したハーシュマン (Hirschman, 1987) が示したように、ジャウィ・プカンは海峡植民地の最初の人口センサスにおいて独自のカテゴリーとして存在していたが、1911年を最後に人口センサスのカテゴリーから消えている。

また、1970年以降の研究では、同時代資料が限られているという資料上の制約から聞き取り調査に依拠する度合いが大きく、本稿で見るように、調査時の価値判断に照らして過去の文献の記述が読み替えられ、侮蔑的な意味を伴った「ジャウィ・プカン」に代えて価値中立的な「ジャウィ・プラナカン」(Jawi Peranakan) が用いられることが多い。その結果、今日ではジャウィ・プカンは現実社会においても学術研究においても忘れられた存在になっており、かつてジャウィ・プカンと呼ばれた人びとがマレー人や他の人びとどのような関係にあり、どのようにしてジャウィ・プカンという集団カテゴリーが社会から忘れ去られたのかはほとんど明らかになっていない。

3. 英語文献に見るジャウィ・プカン

本稿は、20世紀前半のペナンで刊行された英語日刊紙『ストレイツ・エコー』(Straits Echo)⁶の記事をもとに、植民地支配者であるイギリス人と他の白人種⁷および地元の支配層や多数派であるマレー人がジャウィ・プカンという呼称にどのような意味を与えていたのかを明らかにし、ジャウィ・プカンの現地社会における位置づけの変化、とりわけマレー人との関係を考察する。

『ストレイツ・エコー』(刊行1903～1941年)はペナンの華人が発行する日刊の英語新聞である(日曜日は休刊)。1910年の発行部数は750部で、1930年代までに8000部に増えた。編集長は短期間の代役を除いてイギリス人が勤めたが、イギリスや植民地政府に批判的な記事が掲載されることもあり、「人民の新聞」(the People's Paper)と揶揄されることもあった。1931年にセイロン人のマニカソティ・サラヴァナムトゥが編集長に迎えられ(在職1931～1941年)、マラヤの英語新聞で最初の非白人種の編集長となった⁸。編集長以外のスタッフは華人、マレー人、タミル人、シンハリ人などのアジア人やユーラシア人で、記事や広告や投書を通じて華人やムスリムの各団体の活動を知ることができる。投書欄への投書者はペナンおよび近隣諸州に在住する各民族から成り、他の英語新聞やマレー語新聞の記事に対する意見が投書されることもあった。

Archipelago.」(Dennys, 1894:168)、「Malayan; appertaining to the Malayan peoples and countries.」(Wilkinson, 1901:218)がある。

⁶ 『ストレイツ・エコー』については(Lewis, 2006)および(篠崎, 2017: 43)を参照。本稿で典拠を示す際にはSEと略記する。

⁷ 多くの場合はイギリス人であるが、イギリス国籍者以外もいる。当時の行政文書に従えば「ヨーロッパ人」となるが、オーストラリア人もいることから、本稿では「白人種」と呼ぶ。

⁸ 歴代編集長による回想録に、ジョージ・ピラインキン(在職1929～1930年)による(Bilainkin, 1932)とサラヴァナムトゥによる(Saravanamuttu, 1970)がある。

以下、IIで植民地期の文献に見られるジャウィ・プカンについての記載を整理し、ジャウィ・プカンが粗暴で治安悪化をもたらす外来の存在と見られていたことを示す。IIIでは、ロフ以降の研究においてIIで見たジャウィ・プカンについての記載が書き換えられ、ジャウィ・プカンが存在しなかったかのように扱われてきたことを確認する。そのため、IIとIIIで典拠を示す際には原則として文単位で原文を引用して注記する⁹。IVでは『ストレイツ・エコー』の記事をもとに、1910年代までジャウィ・プカンがもっぱら事件と裁判の記事に登場していたことを見た上で、1923年と1931年のマレー人についての紙上論争をたどり、当時のペナン社会におけるジャウィ・プカンの位置づけとその変化について検討する。Vでは、1930年代以降のマラヤ全体でのマレー団体結成の動きに伴ってシンガポール型の民族認識が支配的になる中でペナンのジャウィ・プカンが置かれた位置づけを整理し、結論でペナン型の民族認識の行方を考察する。

II 植民地期の記録に見るジャウィ・プカン

1786年にイギリス人貿易商フランシス・ライトがクダ王国のスルタンと条約を結び、ペナン島を東インド会社領として獲得した。東インド会社は1826年にペナン、マラッカ、シンガポールを海峡植民地として、行政府をペナンに置き、1832年にシンガポールに行政府を移した。

インド人移住者とマレー人女性の子への言及は1820年のジョン・クロフォードの記録に見られる。インドの男性たちが交易のためマラヤとスマトラを訪れ、多くは一定期間の滞在の後にインドに戻ったが、一部は留まって地元の女性と一緒に家庭を作り、ペナン島で定住する人もいた。そのような人びとやその子孫はプラナカンと呼ばれた¹⁰。クロフォードは、プラナカンは両親のそれぞれの言語での会話と書写に通じ、熱心さと活発さと才能によって地元の有力者から高い評価を受けた一方で、マレー人とインド人の両方の悪い特徴を受け継いだと記している¹¹。

ジャウィ・プカンという呼称は東インド会社の軍人ジェームズ・ローによる1836年の記録に登場する。ローによれば、ペナンにはインド人男性とマレー人女性の間生まれたジャウィ・プカンがいて、マレー人の大胆さとインド人の巧妙さ、強烈さ、偽りを受け継いでいる¹²。ローは1850年の記事でも、ジャウィ・プカンは賢く精力的で知性があるが、

⁹ 原文の引用は鍵括弧に入れ、引用者による注記は角括弧に入れて示す。Malayan (マレー人) や Hindostan (インド人) のように歴史的な表現が用いられている場合、本文では今日の表記に従い、注で原文が示されている場合は本文に原語表記を添えていない。

¹⁰ 「They are known by the name of Pâranakan, or half-casts, speak and generally write the language of both parents, and, through their keenness, activity, and endowments, contrive to enjoy a large share of the patronage of the native princes in whose states they are settled.」(Crawford, 1820:134)。

¹¹ 「The motley race formed by these unions is a compound character of no very amiable description, partaking of the vices of both parent stocks.」(Crawford, 1820:134)。

¹² 「A Jawi Pakan is the offspring of a man of Hindostan and a Malayan woman. He inherits the

それゆえに無原則に振る舞うこともあると評している¹³。

ペナンの警察署長 J.D. ヴォーンは、ムハラム月の催し物¹⁴についての1854年の記事でジャウイ・プカンに言及した¹⁵。ヴォーンは1857年の記事でも、ジャウイ・プカンは父親の活力・知性と母親の勇気を兼ね備え、中国やヨーロッパの商人と首尾よく競合したと書いている¹⁶。

ヴォーンは1857年の記事はジャウイ・プカン (Jawi bukan) という呼称を多く用い¹⁷、「ジャウイ・プカン」は村落部に住むマレー人が町の人びとを「町のムスリム」と呼んだものであるのに対し、「ジャウイ・プカン」はマレー人が「自分たちと異なる人びと」という意味で用いた呼称とした。ヴォーンはさらにジャディ・プカン (Jadi bukan) という呼称も紹介し、ジャウイ・プカンまたはジャウイ・プカンの転訛だろうとの推測を披露した¹⁸。(Vaughan, 1857) を引用したものを除けば同時代の文献にジャディ・プカンという記載は見られず、ジャディ・プカンという呼称に一般性があったとは考えにくい¹⁹。しかし (Vaughan, 1857) の引用が繰り返されることで、ジャウイ・プカンという呼称が実際に存在したかのように考える人も現れるようになった²⁰。

boldness of the Malay, and the subtlety, acuteness, and dissimulation of the Hindoo.] (Low, 1836 (1972):250)。ここでは Jawi Pakan と書いているが、同書の別の箇所では Jawi Pukan と書かれている。「The native lenders on interest are chiefly Jawi Pukans, Chinese, and Hidoos.」(Low, 1836 (1972) :140)。

¹³ 「The class to which he belonged to is styled Jawi Pakan, the father being Indian the mother Malayan. The men who belong to this Indo-Malayan tribe are sagacious, energetic and intelligent, but these qualities occasionally render them unprincipled.」(Low, 1850:362)

¹⁴ イスラム暦のムハラム月10日に行われる殉教劇はペナン島で19世紀末頃からボリア (boria) と呼ばれる大衆劇に発展したが、19世紀半ばから20世紀初頭にかけての時期には、しばしば動物の真似をした若者どうしによる路上での喧嘩や騒乱に発展した。

¹⁵ 「I am reminded of the manner in which the “Gamin” or Jawi Pukan of Pinang, (a mixed breed between a Kling or Bengalee and the Malay) personates that animal [tiger].」(Vaughan, 1854:13)。

¹⁶ 「The Jawibukans possess all the courage of the mother combines with the activity, intelligence and cunning of the father; they easily acquire habits of business, prove smart traders, and a great number have amassed considerable fortunes; they compete successfully with European and Chinese Merchants, and of course gain a great ascendancy over their fellow countrymen」(Vaughan, 1857:137-138)。

¹⁷ 「Allusion has been made to the offspring of Malay mothers and Kling or Bengali fathers; they are called Jawi bukans, Jawi pukans, and Jadi bukans indiscriminately, the last term is most commonly used in Pinang. … It is difficult to ascertain which is the right epithet or the origin of the terms; the first means literally “not a Malay”, the second, “the Malay of the village”, and the last “not made” or “is not made”.」(Vaughan, 1857:137)。

¹⁸ 「Jawi bukan appears to be the right term and no doubt was originally used by the Malays to distinguish the half breeds from themselves; “Jawi pukan” might also have been early used to distinguish the inhabitants of the towns from those of the country; and the last term [Jadi bukan] appears to be a corruption of either, it is however the usual name given to all half breeds except those that adopt the Chinese customs.」(Vaughan, 1857:137)。

¹⁹ 同様の見方に (Putten, 2015:337) がある。

²⁰ たとえば1938年の『ストレイツ・エコ』の記事 (SE, 1938.3.22:13) およびそれに対する

ペナンの英語日刊紙『ペナン・ガゼット&ストレイツ・クロニクル』²¹の編集者を勤めたスコットランド出身のジェイムズ・リチャードソン・ローガンは、1867年の記事で、(Low, 1836)を引用した上で、ジャウィ・ブカンの子孫にはマレー人とほとんど区別できない人もインド人とほとんど区別できない人もいと書いている²²。ローガンは華人男性とマレー人女性の通婚による別のグループに言及した際に「ジャウィ・ブカンより柔和で快適な態度」を持つと書いており²³、ジャウィ・ブカンに粗暴という印象を抱いていたことがうかがえる²⁴。

「ジャウィ・ブカン」は海峡植民地の公文書でも使用された。1871年の人口センサスでは民族・国籍がカテゴリー分けされずに列挙され、その1つがジャウィ・ブカンだった²⁵。1891年の人口センサスでは「マレー人とその他の島嶼部の原住民」というカテゴリーが作られ、ジャウィ・ブカンはその中に含まれた。1911年には、海峡植民地の人口センサスではジャウィ・ブカンは「マレー人と同類の諸人種」のカテゴリーに入れられたが、連邦マレー諸州の人口センサスにはジャウィ・ブカンの項目はなかった。1921年から海峡植民地と連邦マレー諸州の人口センサスが合わせて行われるようになり、民族・国籍名からジャウィ・ブカンの項目がなくなった (Hirschman, 1987:573)。

1921年の人口センサスからジャウィ・ブカンの項目がなくなった理由として、統計上の人数が減ったことが指摘されている (Fujimoto, 1989:ii)。その背景の1つとして、マレー人の土地の所有権を保護するために施行された1913年のマレー人保留地法 (Malay Reservation Enactment) で、「マレー人」は「マレー人種に属し、マレー語またはマレー

応答 (SE, 1938.3.28:13) を参照。

²¹ 『ペナン・ガゼット&ストレイツ・クロニクル』 (*Penang Gazette and Straits Chronicle*、以下『ペナン・ガゼット』) は、海峡植民地の最初の新聞である英語新聞『プリンス・オブ・ウェールズ・アイランド・ガゼット』 (*Prince of Wales Island Gazette*、1803年創刊) を前身とし、1838年に『ストレイツ・クロニクル』 (*Straits Chronicle*) を吸収して『ペナン・ガゼット』になった。1910年の発行部数は650部。理事にペナン商業会議所のメンバーが含まれており、同紙はペナンのヨーロッパ人商業界の利益を代弁する新聞として認識されていた (篠崎, 2017:42-43)。

²² 「The class of these men in the public office are mostly related by blood or marriage. The progenitors were Jawi-pakans of Kedah, but while some of the present 1st and 2nd cousins are not distinguishable in person from Klings.」 (Logan, 1885:198)。ローガンは1869年に死去しており、(Logan, 1885) は1867年に書かれた記事である。

²³ 「They are distinguishable by their conceit and forwardness; but have more softness and amenity of manner than the Jawi-pakans; retaining, in this respect, the impress of the Malay decent and association.」 (Logan, 1885:198)。

²⁴ ほかに当時の英語文献で引用以外でジャウィ・ブカンに言及しているものとして、政府の測量士としてシンガポールに12年間滞在したイギリス人による1839年の回想 (Thomson, 1865:84)、マラヤで15年にわたりコーヒー農園を経営したオーストラリア人による記述 (Rathborne, 1898:337) がある。非白人種による記録として、1872年にペナンを訪れたイブラヒム・ムンシは、町で商売に携わっているのはインド人のプラナカンで「ジャウィ・ブカン」と呼ばれていると書いている (Mohd. Fadzil, 1980:114-115)。なお、同書の1975年の英訳版ではジャウィ・ブカンは「Bazaar Malays」と訳されている (Ibrahim, 1975:101)。

²⁵ 1871年にはJaweepekansと書かれ、1881年からJawi Pekanと書かれた。

系の言語を日常的に話し、イスラム教を信仰する者」²⁶と定義された。この定義は後に他の法律や政策で採用されたため、ジャウイ・プカンは自分たちをマレー人と登録するようになった (Khoo, 2014:127)。

ただし、公文書における「ジャウイ・プカン」の使用は1920年代末まで続いていたようである。マラヤ警察のマーヴィン・ウインは、ペナンとその近隣地域における華人とムスリムの秘密結社についてまとめた1941年の研究で、ジャウイ・プカンは紅旗会と白旗会という2つの秘密結社を作り、それぞれが華人の秘密結社と結んだと記している²⁷。1920年代についての記述にジャウイ・プカンへの言及があり、警察では1920年代までジャウイ・プカンの呼称が使われていたことがうかがえる。また、同書の記述²⁸から、1930年代末にはジャウイ・プカンはプラナカンとして知られていたことがうかがえる²⁹。

Ⅲ 学術研究におけるジャウイ・プカン

1. ロフのマレー・ナショナリズム研究

先に見たロフのマレー・ナショナリズム研究は、マレー人女性とインド人ムスリム交易者の間に生まれた子をジャウイ・プラナカンと呼び、その多くはペナンに居住していたがシンガポールの発展に伴ってシンガポールへの移住が増えたと記している³⁰。この記述の脚注で、ジャウイ・プラナカンという呼称はペナンではジャウイ・プカンという呼称に取って代わられたと記しており、これがロフの研究 (Roff 1967) でのジャウイ・プカンへの

²⁶ 「a person belonging to any Malayan race who habitually speaks the Malay language or any Malayan language and professes the Moslem religion」 (Khoo, 2014:133)。「マレー人種」 (Malayan race) はマレー諸島出身者を指す。

²⁷ 「These “bandi-wallah” as they were known locally, became by local inter-marriage the progenitors to a large extent of the Jawi-bukan (“not-Malay”) or Jawi-pekan, or “Peranakan”, community, whose stronghold is in Penang, and whose criminal proclivities and associations with the Red and White Flag societies in Malaya are discussed in subsequent chapters.」 (Wynne, 1941:171)。

²⁸ 「The Jawi-pekans or Peranakans as they are now more commonly known, were, as we shall see, a link in the transition of the Moharram festival from a religious celebration to a hooligan masquerade.」 (Wynne, 1941:188-189)。

²⁹ ただし英語話者の間ではプラナカンは誰もが知る表現だったわけではなかったようである。1938年にリム・ブンケンがシンガポールで華人団体の結成を呼び掛けたという記事 (SE, 1938.3.10:16) が掲載されると、記事中の「アジア人とプラナカン」 (Asiatic and Peranakan) という表現に対して、「プラナカン」はシンガポールの言い方で、ペナンでは一般的ではなく意味がわからない人がいるとして、プラナカンの意味を説明する投書が掲載された (SE, 1938.3.11:8)。

³⁰ 「Comprising in the main the locally born offspring of unions between Malay women and South Indian (chiefly Malabari) Muslim traders, merchants, and settlers, migrant to Malaya in the late eighteenth centuries, the Jawi Peranakan lived for the most part in Penang, though the growth of Singapore attracted many to the south.」 (Roff, 1967 (1994) :48)。

唯一の言及である³¹。この記載は、ジャウィ・プカンについて理解が不正確であるだけでなく、ロフの関心と理解がシンガポールを中心としており、ペナンをはじめとするマラヤの他地域への関心と理解がかなり限られていたことをよく示している。

2. ジュディス・ナガタの「民族モザイク論」

ジャウィ・プカンと呼ばれた人びとについてはジュディス・ナガタの研究 (Nagata, 1979) がある。マレー人、華人、インド人の三大民族という主流の言説に囚われることなくマレーシアの多民族社会を個別に記述するナガタは、インド人とマレー人の間に生まれた子たちも記述の対象にしている。ただしナガタは、(Low, 1836) を引用した上で、その記述のジャウィ・プカンをジャウィ・プラナカンに書き換え、インド人とマレー人の混血者をジャウィ・プラナカンと呼ぶ³²。

また、ジャウィ・プラナカンが1881年から1911年まで人口センサスのカテゴリーだったように読める書き方がされているが³³、前節で見たように人口センサスのカテゴリーはジャウィ・プカンだった。ナガタは、ローやヴォーンのジャウィ・プカンについての記事を引用する際にジャウィ・プカンを書き換え³⁴、ローやヴォーンがジャウィ・プラナカンについて書いていたかのように読める書き方になっている。また、ナガタは「ジャウィ・プカン」は「ジャウィ・プラナカン」の転訛とするが³⁵、その根拠は示されていない。

ナガタは論拠としてしばしばロフの研究 (Roff, 1967) およびナガタによる観察と聞き取りを挙げている。しかしロフの研究は20世紀初頭のシンガポールの事例が中心であり、

³¹ 「The term “Jawi Peranakan” later went out of use, to be replaced by “Jawi Pekan”, or “town Muslim”, especially in Penang where the bulk of the community lives.」(Roff, 1967 (1994):48)。

³² 「Initially, or at least from 1836 when they were first mentioned by Low, they were placed in a unique hybrid category (like the Baba), and known as the Jawi Peranakan. Literally, this means “descended from a Malay”, “Jawi” being the common Middle Eastern term for Malays and Indonesians.」(Nagata, 1979:36)。

³³ 「The Jawi Peranakan were enumerated separately in all the censuses from 1881, when their numbers were put at 2,825, until 1911. Even after the term had been dropped from the official census, however, it continued in popular usage.」(Nagata, 1979:36)。

³⁴ 「For example, it was alleged that Jawi Peranakan “have the courage of the Malay mother, and the activity, intelligence and cunning of the Indian father, and not over-scrupulous about taking bribes... they are smart but untrustworthy... addicted to making vows and pilgrimages... and then deteriorate to vice” (Vaughan, 1857:137-44). Law’s observations of the Jawi Peranakan also stress his “hybrid nature... he inherits the boldness of the Malay, the subtlety, acuteness and dissimulation of the Hindoo... is indefatigable in the pursuit of wealth, and most usurious in the employment of it when gained.... They are often smart interpreters of two or more languages, wily diplomatic agents, and generally respectable in the outward man” (Law, 1836: 250-251).」(Nagata 1979:37)。

³⁵ 「In popular usage, it was often corrupted to “Jawi Pekan”, “Malays of the town”, which is appropriate since most of these hybrids were in fact urban dwellers.」(Nagata, 1979:36)。

ナガタの観察と聞き取りは1972年のペナンでのものであり、地域と時代の違いに関心が払われていないため、20世紀前半のペナンの記述としては正確さに欠けたものとなっている。

ジャウイ・プラナカンなどの呼称には軽蔑的な雰囲気があり、社会的距離を表現したい場合や特定の人物をマレー人の地位から故意に除外したい場合にのみ使用される傾向があるとするナガタ (Nagata, 1979:37) は、時代や地域の違いによらずジャウイ・プラナカンと呼ぶのが妥当であり、植民地当局が住民管理のために用いた (しかも粗暴な人びとというイメージが付きまとった) ジャウイ・ブカンやそれに類する呼称は適切でないと考えたのだろう。なお、ナガタは (Vaughan, 1857) を引用してジャウイ・ブカンという呼称も紹介し、「マレー人に非ず」と説明している³⁶。

ナガタの研究はジャウイ・プラナカンまたはジャウイ・ブカンと呼ばれた人たちについて文献調査と観察・聞き取り調査をもとに多くの有益な情報を提供している。しかし、地域と時代を考慮せずに全てジャウイ・プラナカンと呼んでいるため、ジャウイ・プラナカンとジャウイ・ブカンの関係やそれぞれの自己認識を知るために使うことはできない。それにもかかわらず、これ以降の研究には (Nagata, 1979) を参照したものが多く、ジャウイ・プラナカンとジャウイ・ブカンの関係が曖昧にされたまま研究が重ねられてきている。

3. ヘレン・フジモトのジャウイ・プラナカン研究

ヘレン・フジモトは、南インドのムスリム男性とマレー人女性の通婚を通じて発展したコミュニティをジャウイ・プラナカンと呼び、このグループについて包括的な研究を行った³⁷。

フジモトは、植民地の公文書および人口センサスでジャウイ・ブカンという呼称が用いられたが³⁸、1860年代以降に一般的にジャウイ・プラナカンに取って代わられたとする³⁹。フジモトはプラナカンが「地元生まれ」という意味を持つことに注意を向け、ジャウイ・プラナカンが地元生まれでありながらマレー人コミュニティに十分に同化していない側面を強調した⁴⁰。

³⁶ 「Another permutation was to “Jawi Bukan” which can be glossed as “not Malays at all”, “bukan” being a form of the negative in Malay (Vaughan, 1857:137).」 (Nagata, 1979:36)。

³⁷ 「The Jawi Peranakan group evolved through marriage between South Indian Muslim men and Malay women, and the early history of the Penang South Indian Muslim-Jawi Peranakan community is reminiscent of the trading community established in Malacca and described by Munshi Abdullah.」 (Fujimoto, 1989:i)。

³⁸ 「The term used to describe the Jawi Peranakan in official documents and censuses was Jawi Pekan, or “town Muslims”.」 (Fujimoto, 1989:ii)。

³⁹ 「Throughout the 1860’s and seventies, with growing numbers of second and third generation descendants, the term Jawi Peranakan, meaning local born and of Malay blood, supplanted the term “Jawi Pekan” in common usage.」 (Fujimoto, 1989:41-42)。

⁴⁰ 「During the later half of the nineteenth century this terminology [Jawi Pekan] changed in general usage to the term Jawi Peranakan, thus emphasizing the fact that members of the

人口センサスからジャウィ・プカンの項目がなくなった⁴¹理由として、フジモトは、ジャウィ・プカンのエリート層には生まれた子をマレー人として登録する傾向が1880年代から見られ、その傾向が20世紀初頭に急速に進展したことでジャウィ・プカンの統計上の人数が減ったことを挙げている⁴²。

フジモトは文献調査と現地調査によりジャウィ・プカンについての詳細かつ有益な研究を提供した。ただし、ナガタと同様に、このコミュニティをジャウィ・プラナカンと呼び、議論の論拠としてフジモトが1980年代にペナンで行った聞き取りを挙げるなど、ジャウィ・プカンやジャウィ・プラナカンという呼称や自己認識に関しては誤解を与えかねないものとなっている。

ナガタとフジモトの研究により、ジャウィ・プラナカンまたはジャウィ・プカンと呼ばれる人びとの研究は大きく進んだが、その結果として、ジャウィ・プラナカンとジャウィ・プカンの違いが考慮されないという影響を残した⁴³。

4. クー・サルマ・ナスチオンの歴史遺産研究

ペナンのジョージタウンが2008年にユネスコの世界文化遺産に登録された頃から、ジャウィ・プカンに言及する研究が見られるようになった。

ペナンの歴史遺産の保全と活用に取り組んでいるクー・サルマ・ナスチオンは、ペナンの歴史について多くの論考を発表している。それらのうちジャウィ・プラナカンまたはジャウィ・プカンと呼ばれる人びとについては(Khoo, 2014)の第8章に手際よくまとめられている。そこでは、「ジャウィ・プカン」は「町のムスリム」、「ジャウィ・プラナカン」は「地元生まれの混血者であるムスリム」を意味し⁴⁴、主にインドや中東の出身者を一方

community were peranakan, or local-born, but had not yet been assimilated into the wider Malay community.」(Fujimoto, 1989:ii)。

⁴¹ 「The category of Jawi Pekan was dropped from the 1911 census because of insufficient numbers of Jawi Peranakan, since most members of the group were registering themselves as Malays.」(Fujimoto, 1989:ii)。1911年の人口センサスからジャウィ・プカンがなくなったとしているのは連邦マレー諸州の人口センサスを参照したためだろう。

⁴² 「The latter [the labouring classes] seem to have had no qualms about recording their offspring as Jawi Peranakan, while among the traders and Government servants there was a movement, even as early as the 1880's, to register their offspring as Malays. This tendency was to accelerate into the first decade of the twentieth century until 1911, when all Jawi Peranakan became known, officially, as Malays.」(Fujimoto, 1989:47)。

⁴³ 例えばペナンにあるマレーシア理科大学が刊行したジャウィ・プラナカンについての論集には「Crawford menyatakan bahawa ramai kalangan sarjana yang telah memberi pelbagai takrifan tentang Jawi Pekan (Crawford, 1820:134)」(Omar & Jamaluddin, 2010:3)という記述があり、クロフォードの1820年の記録にジャウィ・プカンの記載があったかのように書かれている。

⁴⁴ 「“Jawi Pekan”, meaning “town Muslims”, is a term commonly used in Kedah and Penang. “Jawi peranakan” denotes “local-born” Muslims of mixed parentage (usually by a foreign father), many of them being in fact second or third generation Tamil Muslims.」(Khoo, 2014:8)。

の親として地元で生まれたムスリムを指すとされている⁴⁵。

クーは、「ジャウイ・プカン」と「ジャウイ・プラナカン」の呼称は交換可能であるとした上で、ジャウイ・プカンは労働者階級または若年層という含意があるためエリート層はジャウイ・プラナカンと呼ばれる方を好み⁴⁶、また、ジャウイ・プカンはペナンおよび隣接するクダ州で広く使われたのに対してジャウイ・プラナカンはシンガポールで広く使われた⁴⁷という違いを紹介している。

5. ワジル・ジャハン・カリムのボリア研究

ペナンの大衆演劇ボリアの研究をまとめたワジル・ジャハン・カリム (Wazir, 2018) は、南アジア出身のムスリム男性とマレー人女性との間に生まれた子およびその子孫はジャウイ・プラナカンであり、マレー人からジャウイ・プカンと呼ばれることがあるとする⁴⁸。

ワジルは、ペナンのムスリム移住者の歴史を概観した第2章でマレー人、ジャウイ・プカン、ジャウイ・プラナカン、アラブ・プラナカンについて整理し、南アジア出身者の血統を引く現地生まれの混血者ムスリムはジャウイ・プラナカンであるとした上で、ペナンの都市部に住むマレー人は血統によらずみなジャウイ・プカンであるとする⁴⁹。「生粋のマレー人」を自認するクダのマレー人であってもペナンの都市部に居住していればジャウイ・プカンであるとするのは⁵⁰、ジャウイ・プカンを文字通り「町のムスリム」と解釈したためであり、類例があまりない解釈として興味深い。ただし、資料に裏付けされた根

⁴⁵ 「The Jawi Peranakan and Jawi Pekan are generally defined as locally born offspring of unions between locals and foreign Muslims; the foreign parent, usually the father, might be of South Indian, North Indian, Pathan, Hadhrami Arab or Middle Eastern origin, or may even include Hindu or Chinese converts.」(Khoo, 2014:121)。

⁴⁶ 「Jawi Pekan and Jawi Peranakan can be used interchangeable, but the class-conscious elite preferred Jawi Peranakan, because Jawi Pekan came to have working-class or juvenile connotations.」(Khoo, 2014:8)。

⁴⁷ 「The term “Jawi Pekan” appears to be more commonly used in Penang and Kedah while the term “Jawi Peranakan” prevailed in Singapore.」(Khoo, 2014:121)。

⁴⁸ 「Jawi Peranakan here refers to hybrid Muslim communities residing in the entrepot cities of Southeast Asia, communities of Indian Muslim, Arab, and Punjabi or Persian origin through the male line, domesticated over generations through marriage to Straits Malay women. Malays sometimes refer to these families as Jawi Pekan or “urban Muslims of the straits”.」(Wazir, 2018 : xxxv-xxxvi)

⁴⁹ 「The urban Malays of George Town were and continue to be referred to as Jawi Pekan while the term Jawi Peranakan was and may still be used to refer to Muslims of George Town of mixed parentage — offspring of men of Northern and Southern Indian Muslim ethnicity with Malay wives.」(Wazir, 2018:28-29)

⁵⁰ 「These Malay wives are Jawi Pekan if they are from George Town — “pekan” refers to an urban nucleus or town. A simpler way to explain Jawi Pekan is to state that all Malays, including Kedah Malays, residing in but not necessarily born in George Town, Melaka and Singapore are Jawi Pekan.」(Wazir, 2018:28-29)

拠が示されていないため、歴史的事実なのかワジルによる分析枠組なのか区別できない。

これらの研究は、文献資料にジャウイ・プカンの記載が現れる文脈を十分に検討せず、調査時の価値基準に従って後付けでジャウイ・プカンの呼称を、またはジャウイ・プカンとジャウイ・プカンを交換可能であるとしている。このため、当時のペナン社会においてジャウイ・プカンという呼称にどのような意味が与えられており、それによって指し示される人びとが社会にどのように位置づけられていたかを知る助けにはならない。

IV 新聞紙上のジャウイ・プカン

1. 事件・裁判記事のジャウイ・プカン

この節では、20世紀前半に刊行されていた英語日刊紙の記事をもとに当時のペナンにおけるジャウイ・プカンに対する認識を検討する。

『ストレイツ・エコー』の紙面では、「ジャウイ・プカン」はもっぱら事件報道または裁判記事に登場する。裁判の記事では法廷での発言が具体的に書かれ、犯行時の様子や法廷でのやり取りを詳しく知ることができる。それらの記事でジャウイ・プカンは被害者、被告人、証人などの異なる役割で登場するが⁵¹、事件と裁判を除けばジャウイ・プカンが登場することは皆無であるため⁵²、紙面を通じてジャウイ・プカンは粗暴で犯罪に関わりやすい人びとという印象を与えている。

この印象は当時のペナンである程度共有されていたようである。殺人事件で殺害教唆の罪に問われていた被告人（華人男性）の弁護人が、検察側の証人はジャウイ・プカンであり、両親からそれぞれの悪徳を受け継いでどちらの美徳も受け継いでいないために証言の信憑性に欠けると述べた⁵³。記事からはこの発言に異議が申し立てられた様子はいかぬ。100年近く前のクロフォードの記述をそのまま写したかのような弁護人の発言からは、この記事が書かれた1909年の時点で、ペナンでは警察や裁判に関わる政府関係者の間でジャウイ・プカンを犯罪者予備軍のように見る態度が公然と共有されていたことがう

⁵¹ 事件記事の例：路上の手押し車からジャウイ・プカンの嬰兒が遺体で発見された（SE, 1906.8.28:4）、刺殺事件を目撃したジャウイ・プカン男性が犯人逮捕に協力した（SE, 1912.2.9:4）、他人の自動車のガソリタンクに砂糖を入れたジャウイ・プカン男性が6週間の禁固刑を受けた（SE, 1918.7.22:10）。警察裁判所の裁判記事の例：ジャウイ・プカンである妻を殺害した容疑で男性が逮捕された（SE, 1906.5.10）、酩酊して公衆に迷惑をかけたジャウイ・プカンが罰金刑を受けた（SE, 1908.12.11:4）。郡裁判所の裁判記事の例：衛生査察員に暴行したジャウイ・プカン男性に5ドルの罰金刑が下された（SE, 1908.11.28:5）。最高裁判所の裁判記事の例：殺人事件で警察を手助けしたジャウイ・プカン男性2人に謝礼が支払われた（SE, 1909.9.30:4）。

⁵² 数少ない例外として、後述の紙上論争を除けば、クランタン州のジャウイ・プカンである郡長に関する記事（SE, 1919.5.8:6）およびジャウイ・プカンによるムハラム月の催し物を存続してほしいという投書（SE, 1920.9.14:8）がある。

⁵³ 「The witness against his client were Jawi Pekans who inherit the vices of both parents and the virtue of neither.」（SE, 1909.10.8:5）。

かがえる。

ジャウィ・プカンが関わる事件と裁判の記事は、1909年まで『ストレイツ・エコー』紙上で年間に数回掲載されていたが、1910年以降はほとんどなくなり、1912年と1918年に1回ずつ掲載されてそれが最後となった⁵⁴。

2. 「マレー人は原住民か」論争 (1923年)

1923年に『ストレイツ・エコー』の紙面を通じてマレー人の意味と原住民性をめぐる紙上論争が起り、その内容からジャウィ・プカンに対する認識を伺うことができる。

1923年4月14日、ジョージタウン市郊外の競技場で行われたサッカーの対抗試合で、試合中の小競り合いをきっかけに両チームのサポーターがグラウンドに乱入し、負傷者が出るほどの騒乱になった。このことを報じた『ストレイツ・エコー』は、対戦したのがマカリスト通りとハットン通りのサッカーチームだったことを、この2つの地区がかつて毎年のムハラム月のボリアの時期にしばしば喧嘩を起こしてきたことと結びつけ、マレー人はどれだけ経っても学ばないという皮肉で記事を締めくくった (SE, 1923.4.16:5)。

マレー人の多くはボリアをジャウィ・プカンがもたらした外来の粗暴な慣行と見ていたが、この記事を書いたイギリス人はマレー人とジャウィ・プカンを区別せずにマレー人と書いた。これに対してモハメダン・サッカー協会の会長であるA. O. メリカン (A. O. Merican) は、騒乱状態は短時間で収束したと記事の事実誤認を指摘した上で、自分たちマレー人はペナンの原住民であるとし、異民族の移民が行っているボリアが持ち出されてマレー人が責められることへの不快感を表明した (SE, 1923.4.19:3)。これに対して『ストレイツ・エコー』は、マレー人がペナンの原住民でもマラヤの原住民でもないことは明らかであると応答した (SE, 1923.4.19:3)。今日ではマレー人がマレーシアの原住民であるというのが公式な見解であるが、当時はフランク・スウェッテナムやR.J. ウィルキンソンのような植民地行政官による研究によってマレー人は他地域からの移住者であるとされていた。

モハメダン・サッカー協会の事務局長であるA. モハメド・ヌル (A. Mohamed Noor) は、自分はマレー人であるとした上で、マラヤに住むサカイ、セマン、ジャクン、ミナンカバウ、アチュ、ジャワ、ボヤンなどの人びとはすべてマレー民族 (Malay nation) であり、マレー民族がマラヤの原住民であることは自明であると反論した (SE, 1923.4.23:5)。

『ストレイツ・エコー』は、「原住民性」(Aboriginalities) と題した社説で、スウェッテナムやウィルキンソンの研究に触れ、サカイやセマンやジャクンのグループとマレー人の間に人種的な関係はなく、マラヤの原住民はセマンと総称される人びとであると考えられ、マレー人はマラヤの原住民ではないと改めて言明した (SE, 1923.4.23:6)。

これ以降、投書欄を通じて「マレー人」の意味を巡る論争が行われた。「人類学者」

⁵⁴ 『ペナン・ガゼット』でも1890年代には事件・裁判の記事にジャウィ・プカンが多く登場していたが、1915年頃から事件・裁判の記事にジャウィ・プカンが見られなくなった。

(Anthropologist) という投書子は、ペラのマレー人とペナンの「いわゆるマレー人」は外見上も言葉の上でも違いが大きく、ペナンでマレー人を名乗っている人の多くは南インドに起源を持つジャウィ・ブカン（市場のマレー人）であってマレー人ではないと主張した（SE, 1923.5.1:3）。

「地理学」(Geography) という投書子は「人類学者」に反論し、マレー人はマラヤの原住民ではないというのは、イギリスではアングロやサクソンなどが集まってイギリス人になったためイギリス人と呼ばれる原住民がいないのと同じ意味においてであり、ペナンでも、マレー語を話してマレーの慣習に従っている限り、インド人やアラブ人の血統が混ざっていても、「いわゆるマレー人」ではなくマレー人であると主張した。また、ジャウィ・ブカンは「市場のマレー人」ではなく「町のマレー人」であると訴えた（SE, 1923.5.2:5）。

これに対して「人類学者」は、「地理学」は人種と民族の概念を混同しているとして、マレー人とタミル人は人種が異なり、ジャウィ・ブカンはマレー人とインド人のどちらとも違う「市場のマレー人」であるとした（SE, 1923.5.4:7）。ここで「市場の」とは、2つ以上の異なる人種の要素を含むためにどちらか一方の人種に分類することができないという意味で使われている。その上で、「人類学者」は、ペナンのジャウィ・ブカンは人種的にマレー人ではないのになぜマレー人と名乗ろうとするのかと問いかけた（SE, 1923.5.4:7）。

「真のマレー人」(Real Malay) を名乗る投書子は、自分の父は東インド（現インドネシア）の出身者であるが自分は真のマレー人であると名乗り、ジャウィ・ブカンもマレー人として受け入れると言明した（SE, 1923.5.7:7）。また、「気にするな」(Jangan Peduli) という筆名の投書子は、「ジャウィ・ブカン」は村落部のマレー人が都市部のムスリムを呼んだもので、都市部のムスリムを自分たちのコミュニティの一員として受け止めようとする意識が働いたのだらうという解釈を示した（SE, 1923.5.8:5）。

「人類学者」は、ジャウィ・ブカンはマレーでもヒンドゥでもなく新しい人種であると繰り返した（SE, 1923.5.11:5）。5月12日の社説は「民族学の問題」(A question of Ethnology) と題し、学校教育を受けたのに宗教や言語と人種を混同する誤りを公然と話す人がいることへの驚きを表明し、ジャウィ・ブカンは新しい人種として形成されており、マレー人を名乗っていても家庭でタミル語を使っているためインド系であることは明らかであると明言した（SE, 1923.5.12:6）。これにより紙上の論争は打ち止めとなった。

この論争では、マレー人はマラヤの原住民ではなく、また、南アジア出身者はマレー人と人種が異なり、そのため両者の混血者であるジャウィ・ブカンはマレー人ではないとする点で『ストレイツ・エコー』と「人類学者」が同じ立場に立ち、それに対して他の人びとがそれぞれの立場から反論した。

『ストレイツ・エコー』と「人類学者」の主張は3つの異なる主張を含んでいる。第一に、マレー人はペナンの（あるいはマラヤの）原住民であるかという問いについてである。セマンなどがマラヤの原住民であってマレー人は外来者であるという立場は、スウェッテナムやウィルキンソンの植民地行政官による研究を参照したものであり、『ストレイツ・エ

コー』紙上では論争の対象にならないものだった。

第二に、セマンなどはマレー人の一部なのかという問いについて、モハメド・ヌルはセマンもマレー人に含まれると主張したが、『ストレイツ・エコー』と「人類学者」から否定された。『ストレイツ・エコー』の社説は、ペナンで有数の学校であるペナン・フリースクールの卒業生であるモハメド・ヌルがセマンもマレー人であると主張したことは、マラヤの歴史を正しく理解していないだけでなく、マレー人をセマンたちと同等に見るといふ認識上の誤りを犯しており、そのことが嘆かわしいと書いている。

この社説を書いたハーバート・ウェルハム⁵⁵は、「適者生存」(survival of the fittest)などの社会進化論に関わる言葉が説明抜きで頻繁に使われていた『ストレイツ・エコー』の編集長であり、ペナン図書館の司書も勤めていた。社会は「野蛮」から「未開」へ、そして「文明」へと単線的に進化するものと信じていたウェルハムにとって、イギリス人はマレー人が「未開」から「文明」に進化するようにと手を差し伸べ、その最高水準のものであるはずのペナン・フリースクールで学んだマレー人が自分たちを「野蛮」と同類に扱おうとしていることが理解を超えていたのだろう。

第三に、ジャウィ・プカンがマレー人の一部なのかという問いについて、「地理学者」は「ジャウィ・プカン」は「町のマレー人」なのでマレー人であるとし、「真のマレー人」は外来起源であってもマラヤで生まれたらマレー人であるとした。「気にするな」は、「ジャウィ・プカン」という呼び名は村落部のマレー人が都市部に住むムスリムを自分たちと同じマレー人と見なしていることの表れであると主張した⁵⁶。インド人ムスリムは外来種であって自分たちマレー人と同種に扱わないでほしいというメリカンのような意見もあったものの、『ストレイツ・エコー』や「人類学者」のように科学の論理で人びとを分類しようとする立場に対し、ジャウィ・プカンとマレー人は分けることができな存在であるとする当事者たちの認識がうかがえる。

3. 「マレー人とは誰か」論争 (1931年)

1920年代半ば以降、マレー人意識の高まりによりマラヤ各地でマレー人団体が結成された。その動きはシンガポールから始まった。シンガポールでは、マレー人が立法参事会における自分たちのコミュニティの代表にアラブ人ではなくマレー人を選ぶよう求めたことを契機に、1926年にシンガポール・マレー人連合 (Kesatuan Melayu Singapura) が結成された。シンガポール・マレー人連合は会員資格を「マレー人種」に限定し、アラブ系とインド系のムスリムは除外された。

この動きに呼応して、ペナンでは1927年にジャウィ・プカンによってペナン・マレー

⁵⁵ ハーバート・ウェルハム (Herbert Welham) は1880年にロンドンで生まれ、フランスの日報の通信員などを経て1905年にペナンに渡って『ペナン・ガゼット』の編集者になった (在職1905～1910年)。『ストレイツ・エコー』編集長は在職1912～1926年。

⁵⁶ 頭文字がジャウィ・プカンと同じ「J.P.」になる「気にするな」という筆名からは、血統を気にすることなくみなマレー人でよいではないかという心の声を感じられる。

人協会 (Penang Malay Association) が設立された。ペナン・マレー人協会はマレー人の定義を「イスラム教を信仰し、習慣的にマレー語を話し、両親の少なくとも一方がマレー人種に属すること」とし (Fujimoto 1989:138)、アラブ系やインド系のムスリムもマレー人に含まれた。この認識は、「マレー人」に与えられた治安判事 (Justice of Peace) や市管理官 (Municipal Commissioner) の職にジャウィ・ブカンが任命されることを通じて、植民地行政官を含めてペナンで広く受け入れられていった (Fujimoto, 1989:142)。

このような状況で、『ストレイツ・エコー』の紙上でマレー人の定義をめぐる論争が起こった。そのきっかけは、1931年1月7日にペナンで行われたロータリークラブの晩餐会でモハメド・アリフ (Mohamed Ariff) がペナンのマレー人について行った講演である (SE, 1931.1.7:7)。スウェットナムの著作『英領マラヤ』 (Swettenham, 1906) を引用して、マレー人の起源は南インドからスマトラに渡ってきた人たちであると考えられると語った。また、ジャウィ・ブカン (町のマレー人) にも言及し、ペナンで生まれたムスリムでマレー語を話す人は祖先が誰であれマレー人であるとした (SE, 1931.1.7:7)。

これを受けて『ストレイツ・エコー』の投書欄で「マレー人とは何か」の論争が生じた。M.S. アリフィン (M.S. Ariffin) は、アリフが講演で「ペナンで生まれたムスリムでマレー語を話す人は祖先が誰であれマレー人である」と言ったことについて、それは父親が「真のマレー人」である場合に限り、父親がベンガル人やクリン人である場合はジャウィ・ブカンであると主張した (SE, 1931.1.12:7)。

アムティアム (Amtiam) は、ペナンで生まれた華人やユーラシア人のムスリムをマレー人と呼ぶのかと問い、さらに、その人物を立法参事会の自分の代表に選ぶのかと問うた。M.S. アリフィンも、ペナンで生まれたユーラシア人、華人、タミル人のムスリムでペナンのマレー語を話す人をペナン・マレー人と呼ぶのかと問いかけた (SE, 1931.1.15:7)。

クダ州アロースターの M.B. は、マレー人とは、マラヤで生まれ、マレー語を話し、ムスリムであることに加え、マラヤ以外の国に頼ることができない人を指すとの考えを示した。そのため華人やタミル人はマレーではなく、マレー人がムスリムでなくなればマレー人と呼ばれなくなるが、マレー人でなくてもイスラム教に改宗した人の子はマラヤで生まれればマレー人であるとした (SE, 1931.1.21:7)。

これに対してバブ (Bab) は、M.B. の「マレー人はムスリムだがムスリムがすべてマレー人であるとは限らない」に賛同し、それはジャウィ・ブカンにも当てはまると主張した。また、この問題の解決のためには立法参事会または市政参事会に自分たちの代表者を選出することが必要であるとした (SE, 1931.1.22:7)。

この論争は、アリフがマレー人の起源はインドであるとしたことに加え、ペナンで生まれたムスリムは血統によらず全てマレー人であると主張したことに端を発する。これに対してアリフィンとアムティアムは、父親が真のマレー人である場合に限り成り立ち、父親がヨーロッパ人、インド人、華人である場合は、現地生まれのムスリムでマレー語を話したとしてもマレー人ではないと反論した。M.B. は、現地生まれでマレー語を話すムスリムであっても、マラヤ以外に頼るべき国がある人はマレー人ではないと定式化した。

ここに見られるのは、人種や言語や宗教の共通性によって人びとを客観的に分類しようとする考え方に対し、その分類法は自分たちの生活水準の向上に役立つのか、具体的には公的な意思決定への参加に役立つのかを問う考え方である。アムティアムが立法参事会で自分の代表として選べるのかと問い、バブがマレー人の定義を議論するためには立法参事会に代表を送ることが肝心であると言ったことには、マレー人とは誰であるかという議論は政治参加と密接に関わっているという考えが見られる。

この議論の中でジャウイ・プカンも言及された。現地生まれのムスリムは全てマレー人であると唱えるアリフは、ジャウイ・プカンを「町のマレー人」と訳してマレー人に含めた。アリフィン是对し、ジャウイ・プカンはインド系の血統を引く現地生まれムスリムであってマレー人ではないとの立場をとった。

アリフィンは、1931年6月4日にペナン・マレー人協会で「マレー人の起源」について講演を行い、「ジャウイ・プカン」という言い方は外国人（とくにイギリス人）に混血者というイメージを与えてムスリムの地位を低めるために避けるべきだと訴えた（SE, 1931.6.4:7）。これに対してアムティアムは、自分はジャウイ・プカンであり、華人やヨーロッパ人に自分がジャウイ・プカンであると名乗ることに何の躊躇もないとした（SE, 1931.6.5:7）。アムティアムはさらに、ジャウイ・プカンであることが知られると立法参事会議員に選ばれない恐れがあるため、ジャウイ・プカンであることを隠して自分はマレー人であると主張している人たちがいるとした上で、自分はジャウイ・プカンであることを捨てることはないと言っている（SE, 1931.6.5:7）。

この論争で問われたのは、現地生まれのムスリムでマレー語を話す人はすべてマレー人であるという主張に対し、父親がマレー諸島出身者でない場合でもマレー人とみなすのかという問題である。父親が華人やヨーロッパ人であればその子はマレー人ではないとする見方は共通のものだったが、インド系ムスリムについては考え方の違いが見られた。父親がインド系であればジャウイ・プカンであってマレー人ではないとする立場がある一方で、ジャウイ・プカンをマレー人として認める立場もあり、ジャウイ・プカンにもマレー人を名乗る人びとがいた。

その人物がマラヤ以外の国に頼る国があるか否か、あるいは自分たちがその人物を立法参事会への代表として選ぶのかという質問が問題にしているのは、自分たちのコミュニティの地位向上のための枠組をどのように捉えるかであり、それに貢献するかどうかが重要であって、血統によって判断するのが妥当であるとは限らないという考え方である。その考え方はペナンではマレー人とジャウイ・プカン間で共有されていたことがうかがえるが、マラヤ全体での独立について考えるようになると、ペナンのジャウイ・プカンはマレー人という枠組の中にどのように位置づけられるかが問われることになる。

V マレー人団体とジャウイ・プカン

1931年の論争以降、『ストレイツ・エコー』紙上ではジャウイ・プカンが話題になるこ

とはほとんどなくなった。これ以降、マレー人の定義を巡るシンガポールとペナンの食い違いがマラヤ全体でのマレー人団体の結成の動きに伴って表面化する。

ペナンで発行されていたマレー語雑誌『サウダラ』(*Saudara*)をもとに1934年に結成されたペンフレンド同盟会(Sahabat Pena)は、州の違いを越えたマレー人意識の醸成を呼びかけた初の試みとなった。1935年末までにマラヤの全ての州に支部が作られ、会員数は2000人を数えたが、同会の中央であるペナンでアラブ系とインド系のムスリムが中心的な立場にいることを嫌った他州の支部の反発を受け、同会の活動は低迷化した(Roff, 1994:212-219; Fujimoto, 1989:144-149)。

1930年代後半にマラヤ各州でマレー人団体が結成され、ペナンでも1937年にシンガポール・マレー人連合のペナン支部が結成された。「真のマレー人」を自認するシンガポール・マレー人連合と同じマレー人の定義を採用し、ジャウィ・ブカンを中心とするペナン・マレー人協会に対抗した。ただし活動の規模ではペナン・マレー人協会に及ばず、シンガポール・マレー人連合ペナン支部はほとんど名目上の存在だった。

1939年8月、シンガポールとスランゴールのマレー人団体の主導により、マレー人の全国組織の結成について議論するためにマレー人団体の全国会議がクアラルンプールで開催された。ペナンからはシンガポール・マレー人連合ペナン支部だけが会議に招かれたが、ペナン・マレー人協会も会議に代表を送り、会議はまずマレー人の定義についての議論に時間を費やすことになった。

ペナン・マレー人協会が両親の少なくとも一方がマレー諸島出身者であればマレー人であるとの立場を主張したのに対し、シンガポール・マレー人連合は父親がマレー諸島出身者であることを強く主張した。会議ではシンガポール・マレー人連合の定義が支持され、ペナン・マレー人協会は会議から除外された。全国組織の結成についての議論は結論が得られず、1940年12月にシンガポールで第2回全国会議が開催されたが、全国組織の結成には結びつかなかった(Roff, 1994:242; Fujimoto, 1989:149-151)。

1945年に第二次世界大戦が終結すると、マラヤに復帰したイギリスは、マラヤ各州のスルタンを廃位にしてマレー人、華人、インド人に対等な市民権を与えるマラヤン連合案を提案した。これに対して各州のマレー人団体が反対の声をあげ、1946年にマレー人政党の統一マレー人国民組織(United Malays National Organisation, UMNO)が設立された。UMNOは各州の支部を整えるにあたり、ペナンで勢力を持つペナン・マレー人協会にUMNOペナン州支部を組織するよう要請した。ペナン・マレー人協会の会長がUMNOのペナン支部長になり、ペナン・マレー人協会がUMNOに加わった(Fujimoto, 1989:153-154)。

シンガポールはマラヤから切り離されてマラヤと異なる脱植民地化の過程をたどることになるが、マラヤではUMNOを中心に1957年の独立に向けた準備が進められ、シンガポール型の民族認識に基づく民族統合モデルが公式のものとなっていった。ペナンもシンガポール型の民族統合モデルの適用対象となったが、ペナンでは実際にはインド系ムスリムがマレー人として影響力を持ち続けた。

VI 結論

植民地期のペナンの都市部には、インド出身のムスリム男性とマレー人女性の間に生まれた子およびその子孫のコミュニティがあった。このコミュニティは村落部のマレー人からジャウイ・プカン（町のムスリム）と呼ばれたことから、植民地の公文書でもジャウイ・プカンと呼ばれた。イギリス人はジャウイ・プカンを粗暴な人びとと見ており、そのような記録は1830年代から見られる。ペナンの英語新聞ではジャウイ・プカンはもっぱら事件または裁判の記録に登場し、ジャウイ・プカンは粗暴な人びとであるという印象を強め、この状況は1910年頃まで続いた。

植民地行政官によるマレー研究はマレー人をマラヤにおける外来移民と見ており、イギリス人はジャウイ・プカンとマレー人をしばしば同一視した。マレー人の中にはジャウイ・プカンと同一視されることを嫌う人もいたが、1923年の紙上論争では科学的な人種概念によってマレー人とインド人を区別する主張が見られた一方で、ジャウイ・プカンをマレー人に含める考え方も見られた。1931年の紙上論争では、人種や言語や宗教などの客観的な指標で人びとを分類する考え方に対し、自分たちが暮らす場において公的な意思決定に参加できる枠組みが重要であり、そのことを踏まえてマレー人とジャウイ・プカンを同一のグループと捉える立場も見られた。

1930年代に各州のマレー人団体が集まってマラヤ大のマレー人団体を結成する動きが生じた際に、ペナン・マレー人協会は両親の一方がマレー人であればマレー人と見なすことを提案したが、シンガポールのマレー人団体が提案する両親がともにマレー人である人のみをマレー人とする定義が採用され、ペナン・マレー人協会はマラヤ大のマレー人組織の結成の議論に参加しなかった。しかし1946年にマレー人の民族政党が結成されると、ペナン・マレー人協会がそのペナン州支部を担った。ジャウイ・プカンという呼称は聞かれなくなったが、それが指し示していたインド系ムスリムはマレー人に含まれた。

マレー人とジャウイ・プカンは民族意識において互いに裏表の関係にある存在であり、マレー人について考える上ではジャウイ・プカンについて考えることが不可欠である。マレー・ナショナリズム研究の古典であるロフの研究はシンガポールの枠組を通じてマレー民族認識を見ており、ペナンにはほとんど目を向けていない。シンガポール以外のマレー民族認識を見る上では、ペナンのジャウイ・プカンをはじめとするプラナカンに注目するのが有効な方法である。ただし、既存研究では、「ジャウイ・プカン」は侮蔑的な文脈で使われた呼称であるという理由から、主にシンガポールで使われていたジャウイ・プラナカンによって置き換えられ、ジャウイ・プカンという呼称は善意によって忘却されている。資料や研究は善意による忘却や修正があることに留意して読み解く必要がある。

〈参考文献〉

英語・マレー語文献

- Bilainkin, George. (1932 [2010]). *Hail Penang! Being the Narrative of Comedies and Tragedies in a Tropical Outpost, among Europeans, Chinese, Malays and Indians*, Penang: Areca Books [originally published in 1932 by Sampson Low Marston].
- Crawfurd, John (1820) *History of the Indian Archipelago* (3 volumes) [Reprinted: in 1980 by B.R. Publishing].
- (1852) *Grammar and Dictionary of the Malay Language, with a Preliminary Dissertation* (Vol.2), London: Smith, Elder, and Co.
- Dennys, N.B. (1894) *Descriptive Dictionary of British Malaya*, London: “London and China Telegraph” Office.
- Fujimoto, Helen (1989) *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, Institute for the Study of Language and Cultures of Asia and Africa.
- Hirschman, Charles (1987) “The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classification”, *Journal of Asian Studies*, 46 (3), 555-582.
- Ibrahim Munshi (1975) *The Voyages of Mohamed Ibrahim Munshi*, New York: Oxford University Press [Translated by Amin Sweeney and Nigel Phillips].
- Khoo Salma Nasution (2014) *The Chulia in Penang: Patronage and Place-Making around the Kapitan Kling Mosque 1786-1957*, Penang: Areca Books.
- Laffan, Michael Francis (2003) *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*, London: New York: Routledge Curzon.
- Lewis, Su Lin (2006) “Echoes of Cosmopolitanism: Colonial Penang’s ‘Indigenous’ English Press”, Kaul, Chandrika, *Media and the British Empire*, New York: Palgrave Macmillan, 233-249.
- Logan, J. (1885) “Plan for a Volunteer Police in the Muda Districts, Province Wellesley”, *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, No.15, 173-202.
- Low, Captain James (1836) *A Dissertation on the Soil & Agriculture of the British Settlement of Penang, or Prince of Wales Island, in the Straits of Malacca*, Singapore Free Press [reprinted: Low James, 1972. *The British Settlement of Penang*. Oxford University Press].
- Low, James (1850) “An account of the Origin and Progress of the British Colonies in the East”, *The Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol.4, 360-379.
- Mohd. Fadzil Othman ed. (1980) *Kisah Pelayaran Muhammad Ibrahim Munsyi*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Nagata, Judith (1979) *Malaysian Mosaic: Perspectives from a Poly-Ethnic Society*, Vancouver:

- University of British Columbia Press.
- Omar Yusoff & Jamaluddin Aziz eds. (2010) *Jawi Peranakan di Pulau Pinang*, Pulau Pinang: Penerbit Universiti Sains Malaysia.
- Putten, Jan van der (2015) “Burlesquing Muharram Processions into Carnavalesque *Boria*”, Formichi, Chiara & R. Michael Feener eds., *Shi'ism in South East Asia: Alid Piety and Sectarian Constructions*, New York: Oxford University Press, 203-222.
- Rathborne, Ambrose B. (1898) *Camping and Tramping in Malaya: Fifteen Years' Pioneering in the Native States of the Malay Peninsula*, London: Swan Sonnenschein.
- Roff, William R. (1967 [1994]) *The Origins of Malay Nationalism*. (Second edition). Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Saravanamuttu, Manicasothy (1970 [2010]) *The Sara Saga*, Penang: Areca Books [original edition published in 1970 by Penang: Cathay Printers].
- Swettenham, Frank (1906) *British Malaya: An Account of the Origin and Progress of British Influence in Malaya*, London: John Lane the Bodley Head.
- Thomson, J. T. (1865) *Sequel to Some Glimpses into Life in the Far East*, London: Richardson.
- Vaughan, J. D. (1854) “Notes on the Chinese of Pinang”, *The Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol.8, 1-27.
- (1857) “Notes on the Malays of Pinang and Province Wellesley”, *The Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, (New Series) Vol.2, No.2, 115-175.
- Wazir Jahan Karim (2018) *Boria: From Passion Play to Malay-Jawi Peranakan Parody*, Petaling Jaya, Pelanduk Publications.
- Wilkinson, R. J. (1901) *A Malay-English Dictionary*, Singapore: Kelly & Walsh.
- Wynne, Mervyn Llewelyn (1941 [2000]) *Triad and Tabut: A Survey of the Origin and Diffusion of Chinese and Mohamedan Secret Societies in the Malay Peninsula, AD 1800-1935*, London: Routledge.

日本語文献

- 貞好康志 2016『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』木犀社。
- 篠崎香織 2017『プラナカンの誕生——海峡植民地ペナンの華人と政治参加』九州大学出版会。
- 山口元樹 2018『インドネシアのイスラーム改革主義運動——アラブ人コミュニティの教育活動と社会統合』慶應義塾大学出版会。

(やまもと・ひろゆき 京都大学)

2023年6月29日掲載決定